さざなみ国語教室
さざなみ国語教室
第497号　2023年8月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

「いまを生きる」

増田　朋子

「いまを生きる」滋賀大学教育学部附属小学校の基本理念です。

滋賀大学教育学部附属小学校を卒業して三十年以上が経ちました。

「いまを生きる」どんな時もこの言葉が私を支えてくれました。

と、言えば恰好がいいところですが、全くの嘘です。正直なところ覚えていませんでした。

先日仕事の関係で附小の近くに行く機会があり、卒業ぶりに訪ねてみました。校門を前に一礼し、最初に目に飛び込んできたのが「いまを生きる」と書かれた記念碑でした。懐かしさだけでは説明できない、こみ上げる想いに、自然と涙が溢れました。

附小の中をぐるっと歩くと、いたるところに懐かしい思い出がよみがえり、きらきらと目を輝かせて吉永先生の授業を受けていた幼い自分の姿が見えました。

歳を重ねるごとに、過去への反省と後悔は増え続け、減っていくのは未来への夢と希望、いつまでも未熟なまま成長できない自分と向き合えない日々。

一生懸命いまを生きている、と胸を張って言えるのか？と記念碑に問いかけられたように感じました。

自分の根底を作ってくれた場所であり、今も支えあえる友人と出会えた場所であり、よき師と巡り会えた場所であり、その場所に今自分は立っている。そう思うと自然と背筋が伸び、「いまを生きなければ」という思いが溢れました。

「いまを生きる」この瞬間を大切に生きていく、それが、過去と現在と未来の自分を、自分と関わってくれたすべての人を大切にするということだという思いが、心の中を満たしていきました。大切に思える言葉を思い出させてくれた附小にありがとう、と一礼をして校門をあとにしました。

私は今、東京で医師として働いています。日常の業務に忙殺され、大切なものを忘れてしまいそうになることもあります。医療にかかわらない文章を書くことも本当に久しぶりです。この原稿を書かせていただくにあたり、自分なりの「いまを生きる」を考える機会を与えていただきました。

健康でいる、笑顔でいる、支えてくれる人がいて、支えたい人がいる、ありがとうと言ってくれる人がいて、ありがとうと伝えたい人がいる、自分が幸せであることに感謝する、みんなの幸せを願う、これが私の「いまを生きる」です。吉永先生、ありがとうございました。

（東京警察病院泌尿器科主任医長）

さざなみ

▼小見出しに「教科書が読めるようにする教育を」や「アクティブラーニングは絵に描いた餅」という小見出しがズキンと胸に刺さる本があります。『AI　VS　教科書が読めない子どもたち』（新井紀子・東洋経済・2018年Ｉ刷）（2019年14刷では30万部突破の帯）▼この書を再度、読み返したのは、基礎と学力の育成には「汎用的読解力」が大事であると知ったからです。汎用的読解力を「分野を問わず、図表も含めたあらゆる言語化された情報を正確に読み解く力」として理解し、それに関することを調べ、その教科の教科書を正確に読める力を育てることの大事さに行きつきました▼首相（しゅそう）東西（とうせい）大手（だいて）用いる（よういる）現役（げんやく）物理（もり）等と読む中学生がいること。また、「学業・学級・学年」の読み方はは全て「がっこう」と読む子に理由を尋ねると「その方がよく当たる」という答えが返ってきたそうです。これらはよそ事でなく、身に覚えがあるような事例です。「教科書を読む力」を育てる授業をしてきたかと自問するばかりです▼教科書の文を理解しているであろうという「思い込み」と大体の子が読めていればOKという甘さがあります。「読めない子」がいるはずという思いを持ち視点を定め各教科等に亘っての授業改善が急務です。

（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

「真似ぶ」から「学ぶ」へ

弓削　裕之

本校では、前半（Ａ）と後半（Ｂ）のグループに分かれて教育実習を行っている。以前、Ａグループの先生お一人の実習最終日と、Ｂグループの実習初日が重なったことがあった。Ｂグループの実習の最後、一言ずつ感想を尋ねたところ、次のようなお話をされた。

「実習の初日、授業中に、前半グループの先生が机間指導をされる姿を見ました。その時の私は、（先輩はすごく動いているな。私は一時間ずっと座ったままだったな。）と思いました。でも、今、あの時の先輩と同じように動くことができている自分がいます。」

あの日、Ｂグループの先生方は、実習を終えようとしている一人の先輩の姿を目の当たりにした。そのことが、二日目以降の先生方に変化を与えた。先輩の動きを「真似（まね）ぶ」ことが、教師としての歩みのスタートとなったのだ。

私の教育活動も、そのほとんどが先輩や同僚の先生方から学んだことである。初めは、相学級の先生のやり方をまねることから始めた。失敗を繰り返すことで、「何が違うんだろう」と、その姿をより細かいところまで観察するようになった。どうしてもうまくいかないことがあり、「あのやり方は、〇〇先生だから味が出るんだよ」と教えていただくこともあった。

それぞれの先生の持つ、にじみ出るような人間性まではまねすることができないんだなと痛感した。そして、私にとっての「自分らしさ」とは何だろうと考えるようになった。自分も人からまねてもらえる教師にならねばと、背筋を伸ばした。

先日、昨年度の研究記録をまとめた「菩提樹」が届いた。一・二・三年生は「前期グループ」として、ドッジビーの遊びを通した縦割りでの学び合い活動を行った。

・３年生が守ってくれたり、２年生がわからないことを教えてくれたりして、頼もしいです。わたしたち１年生も、逃げたり、投げたりしてがんばり、強いチームを作りたいです。（１年生）

・先生の前だけではなく、練習の最後でもあいさつするよと３年生が言ってくれました。３年生はわたしたちとちがってリーダーなんだなと思いました。（２年生）

・３年生がリーダーとして、最初ははずかしくて何もしゃべれなかったけれど、だんだん自分に自信が持てて、リズムがとりやすくなった。１、２、３年生が協力して活動することができた。来年も、違う学年と協力して、何かをなしとげたい。（３年生）

あこがれに出会い、「真似ぶ」ことから始めた子どもたちが、いつしかまねをされる存在になる。それぞれが「自分らしさ」を見つけるために、大切なステップだと感じた。

（京都女子大学附属小学校）

意図的なモデル活用を考える

谷口　映介

「お願いやお礼の手紙を書こう」（東京書籍四年上）での実践を報告する。相手や目的に応じて書く事柄や言葉の使い方を考え、手紙の形式に気を付けて、お願いやお礼の手紙を書くことが学習のめあてである。手紙を書く相手は、社会科の学習や校外学習でお世話になった清掃センターと森林センターの職員の方とした。四年生にとって、手紙の形式に則って書くことは初めての経験であるため、モデル（書き方例）の提示の仕方を工夫する必要がある。本実践では、二段階のモデル提示を試みた。

一．二段階のモデル活用

モデルは、工夫を見つけることで自分の文章に転用できる教科書のモデル（以下、ＧＯＯＤモデル）と、間違った語や文、あるいは表現から学習者の気付きを促すモデル（以下、ＢＡＤモデル）の二つを活用した。学習では、初めての経験ではあるものの、いきなりＧＯＯＤモデルを見せるのではなく、ＢＡＤモデルを提示して、学習者の違和感や言い換える言葉を引き出すことを重視した。

【ＢＡＤモデル：お願いの手紙】

わたしは、竜王小学校の谷口です。今、ぼくは、動物について調べています。なので、動物について教えてください。（中略）教えてもらったことは、今度発表します。では、よろしくお願いします。さようなら。

森林学習でお世話になった方に対して、森に住む動物の種類や保護活動について資料の送付をお願いする趣旨である。子ども達からは、次の様な意見が出た。書き方への思考が促されたことが分かる。

Ｃ：「なので」というのは、おかしいと思います。「だから」の方がいいです。（話し言葉と書き言葉）

Ｃ：「よければ」とか、丁寧に言う方がいいと思います。

Ｃ：「動物について」と書いているけれど、動物の何について知りたいのかが分かりません。

Ｃ：ぼくは、高取山に住む動物の種類を知りたいです。

Ｃ：どこで、いつ発表するのかも書いた方がいいと思います。（後略）

話し合いの後、教科書ではお願いする手紙はどの様に書かれているのかを確かめた。正式な手紙の書き方を知りたいという思いが強かったようで、自ら声に出して確かめる姿が見られた。その後は、丁寧な言葉遣いや美しい文字、要件や何に対するお礼かが分かるように表現を考えた。正式な便箋を使い真剣な眼差しで書く姿が印象的であった。今後も、言語活動の目的に応じたモデル活用の在り方を模索したい。

（竜王町立竜王小学校）

主体的に学び、納得解を生み出す問い作り

高木　富也

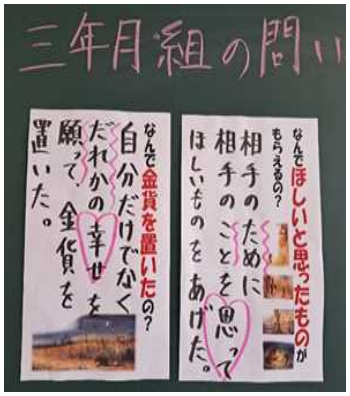
前回の機関誌では、【課題解決につなげる問い作り】と題して、三年生文学「すいせんのラッパ」における実践を報告した。教材と単元のゴール（言語活動）を意欲的に繋ぐのが「問い」であると感じたこと、学びを自分事とすることで、主体的に学んでいく姿が見られたことが成果であった。今回も引き続きの実践として、三年生文学「はりねずみと金貨」の問い作りと学びの様子を報告する。

本教材では、【あらすじをまとめる】ことを単元のゴールとし、言語活動として「世界の絵本を読んであらすじカードにまとめよう」と設定した。初発の感想の時点で、『なぜ最後に金貨を置いたのか？』という疑問が多く出てきた。もちろんこの問いが出てくることは教師も予想しており、教材がもつ力であるとも考える。素直にそのまま、満場一致で学級の問いと設定した。特徴的なのは、二つ目の問い『なんでほしいと思ったものがもらえるの？』である。主人公のはりねずみが、冬ごもりのための物を探して歩き回る先々で、様々な生き物と出会い、探している物を譲り受けるという流れが、児童には不思議でたまらなかったようだ。この問いをどのように設定するか相談する場面でも、「上手く言えないんだけどさ…」「どこかで見ていたのかな…」「いや、でもそれは違うんじゃない？」「子ぐまだけは、金貨のことを知らないじゃないか！」と、盛り上がっていた。教師が直接的に、「なぜでしょうか？」「どんな気持ちでしょうか？」と問いかけるのではなく、【問い作り】という活動を通すことで、主体的に作品と向き合う姿が見られたことが大きな価値であった。

学びを進めていく中で『自分だけでなく、だれかの幸せを願って、金貨を置いた。』『相手のために、相手のことを思ってほしいものをあげた。』という、この学級だからこそその納得解が生まれた。問いを解決した時の学級全体で生まれた満足感は、何とも言えない良い雰囲気であった。

今回の実践で、児童から生まれた「考えたい！」という意欲を、いかに教師が上手くコーディネートするかが重要であると感じた。教師は時として、深い教材研究をすればするほど、「これにも気づかせたい！」「それもいいけど、この点はどうかな？」と自己満足的な指導になってしまうことがある。過去の自分がそうであった。深い教材研究を土台としながらも、児童の関心や意欲を丁寧にみとり、主体的に学ぶ場を創っていくこと。その一つの可能性が問い作りであると学んだ。

（東近江市立能登川南小学校）



Ｓくんと「一つの花」

少徳　信

合同研究会でも話したが、改めてＳくんの学びについてお伝えできればと思う。

Ｓくんは自学級の中でも特に国語について苦手意識を持っていた児童である。漢字が苦手で、長い文章を読むことに対して拒否反応を示していた。四月当初には、「先生、俺、国語嫌いやねん」と伝えに来ることもあった。どの教科も頑張ろうとする気持ちはあるものの、特に国語に関してはすぐに力が抜けてしまうことが彼の大きな課題であった。

そんな彼に変化が見られた瞬間が二つある。一つ目は、視写に取り組んだときである。単元に入るときの予想では、漢字が苦手ということもあり、視写についてもかなり苦戦するだろうと考えていた。しかしふたを開けてみると、「これ、今までの国語で一番面白いわ」と連発し、「俺、最後まで集中して書ききる」と宣言し、時間はかかりながらも最後まで書ききって見せた。なぜこんなに頑張れたのか聞いてみると、「自分のペースでできるから」とのこと。今までの音読ではみんなと一緒のペースで読まなければならず、ついて行くのにいっぱいいっぱいで内容を読み取るどころの話ではなかったことを教えてくれた。彼がこんなに生き生きと学習に取り組む姿を見るのは初めてであった。

二つ目は、自分の考えたい問いについて、友達と付箋を用いて交流していたときである。今までの学習では、なかなか自分の意見にもなかなか反応できずにいた姿が目立っていた。しかし、今回の学習においては、「それ、俺も思ってた！」という声が多く聞かれた。友達の意見に反応することや、そもそも友達の言っていることが理解できることが嬉しかったとのことだった。特にその姿が見られたのは、友達が「このコスモスに、お父さんの思いが込められてると思う」と発言したときだった。彼は待ってましたと言わんばかりに「俺も思ってた！」と叫び、意気揚々と話し出した。「ここの場面でな、お父さんがゆみ子にコスモスを渡すんやけどな、こんときな、絶対普通にあげた訳じゃないと思うねん」など、自分の意見を話し、友達もその意見を大切に聞いていた。その周りの友達と一緒に学べている実感が、彼の学びに向かう意欲をいっそう大きくしたのだろう。学習後、充実した表情とともに、俺、頑張ったと照れながらも嬉しそうに伝えに来てくれた。

今回の単元でＳくんと関わるうちに、改めて子ども一人ひとりが学びの舞台に乗ることが、学ぶ上では欠かせないと感じた。嫌いと言っていても、その根底には伸びたい、できるようになりたいという思いを持っている。その思いに応えられるような授業を提供できるようになりたいと強く感じた。

（彦根市立高宮小学校）

第5回近江の子ども俳句教室
第八十六回日本国語教育学会全国大会

好光　幹雄

七月二十二日、大津市生涯学習センターにて「第５回近江の子ども俳句教室」主催 ＮｐＯ法人現代の教育問題研究所（理事長 吉永幸司）を開催。多数の親子が参加。楽しい俳句教室が四年ぶりに対面でできました。

「今日は暑いですね。今食べたいものは？」

「アイス、スイカ、かき氷、・・・　ところてん。」

「ところてん、皆さん知ってますか？漢字はどんな漢字？」

「心太」

このようにして、日常生活の中から季節感のあるものを見つけ板書していきます。食べ物に始まり、空に見えるもの（夏の雲、入道雲、雲の峰、大花火、遠花火、手花火・・・）、聞こえもの（風鈴、虫の声、蝉時雨・・・）夏の花（向日葵、朝顔、百合・・・）。会場には子どもたちが発言する度に実際の新鮮な夏野菜を取り出して見せ、会場には百合の花も生け、できるだけ夏の風物詩を実感してもらいながら季語の勉強をしました。

次に板書した季語を使ってビンゴゲーム。子どもたちは無意識の内に季語を幾度も頭の中で繰り返します。こうしてゲームが盛り上がり、季語が子ども中に浸透していきます。

次に、俳句の詠み方の指導を一年生でも詠めるように丁寧にステップを踏んで行いました。

上五　あおいそら
中七　〇〇〇〇〇〇〇
下五　えがくゆめ

この中七に、先ず夏の花の季語を選んで入れていくことからします。そうする中で、俳句の基本的な形が分かってきます。以下、説明が長くなるので割愛します。こうして、全く初めての一年生をはじめ、多くの素敵な作品が生まれました。

滋賀県知事賞　（以下、学校名略）

うみがめと　いっしょにおよぐ　ダイビング　京都　二年　浮村聡一

滋賀県教育長賞

かきごおり　どんないろに　しようかな　滋賀　一年　山田巴絵

ＮｐＯ現代の教育問題研究所賞

ひわまりだ　きれいな黄色　太ようみたい　滋賀　二年　川畑そな

すいかわり　見えない前がくらいんだ　滋賀　二年　岸場弥咲

朝顔が　ピンクむらさき　いっぱいだ　滋賀　二年　濱野禾菜

夏やすい　水をもらって　うれしいな　滋賀　三年　山本悠太

かき氷　今食べたいな　弟と　滋賀　三年　福永彩乃

夏休み　イルカと一緒に　泳ぎたい　京都　四年　浮村美千子

夏休み　宿題たまって　大変だ　京都　四年　石村美穂子

お祭りは　楽しすぎだよ　うれしいな　滋賀　五年　森上あかり

夏休み　みんなと旅行　楽しみだ　滋賀　五年　皆川桃百香

扇風機　あーっと叫び　二分半　大阪　五年　鶴田淳悟

最後になりましたが、ご後援を賜りました滋賀県知事様、滋賀県教育長様、また保護者と実行委員会の皆様に厚く御礼申し上げます。次回もまたご支援、ご応募のほど宜しくお願いいたします。

向日葵と挨拶をして伸びる子等　幹雄

第八十六回日本国語教育学会全国大会（八月十日十一日、筑波大学附属小学校）。テーマは「豊かな言語生活を拓く国語教育の創造ー「言葉の学び」への自覚が育つ単元学習の開発ー」。

全体会の公開授業は、檀上で筑波大学附属小学校六年生と弥延浩史先生が「きつねの窓」を主教材に「ファンタジーの秘密を探ろう」という単元の一幕を展開。文学を学ぶ目的、そしてファンタジーって何だろうと改めて問い直す機会となりました。現実ー非現実ー現実を通して主人公がどのように変容するのか。それは恰も意識しなかったことを意識化させ可視化させることによる自己のメタ認知であり、正しく自覚なのでしょう。「きつねの窓」の場合は、カタルシスと言ってもよいでしょう。

その意味では、俳句もまた虚構であり、ファンタジーと共通するファクターがあります。文学によって培われる人間性、そして学校教育の中での重要性が再認識されました。

私も若い頃この大会で発表させて頂き鍛えて頂きましたが、国語教育を志す仲間が全国から集うその姿と熱気に、圧倒された二日間でした。

（大津市立膳所小学校臨時講師　近江の子ども俳句教室実行委員長）

編集後記

▼７月例会（四九六回）は、同研究会」（竹の会・東風の会・さざなみ国語教室）に参加した。会場は・京都女子大学。コロナ禍の影響で３年間自粛していたため４年ぶり開催である。▼研究主題は「『深い学び』を生み出すための授業の改善」について研究協議を行った▼基調講演「いま求められている「学び」のありかた」川端建治（合同研究会会長）による個別最適の学びについての自力学習及び自己調整力面から授業改善の視点が示された。続いて提案及び協議を行った▼提案①文学で培う国語力とは～言葉を通した人間力の高まりを目指して～「一つの花」少徳信（彦根市立高宮小）司会：北川雅士（彦根市立城南小学校）指導助言：池嵜繁伸（彦根市立佐和山小）提案②「子どもが生きる」授業の改善～情報活用能力を用いて課題を追究し学習を自己調整できる学習環境づくり～「すがたをかえる大豆」竹中優志（京都市立藤ノ森小）司会：若松俊介（京都教育大学附属桃山小）指導助言：西田淳（奈良女子大学附属小）提案③順序に目を向けながら読む～一年生説明文の実践より～「くちばし」提案：中川　洋（仁川学院小）司会：吉村光基（仁川学院小学校）指導助言：多賀一郎（教育アドバイザー）▼講演「主体的な言葉の学び手を育てる」森邦博（京都女子大学講師）「研究総括」は吉永幸司が行った。（文中敬称略）

▼巻頭には、増田朋子先生から玉稿を頂きました。深謝します。（吉永幸司）